

5 将来的なICT利活用のあり方について

4章では、2010年までの利活用促進を念頭において、現在の高齢者を取り巻くICT利活用環境を前提としたユーザビリティ向上のための配慮事項をまとめました。現状の利用形態においては、多くの場合、ユーザが一定の利用意向をもち、必要とされるスキルを身に付けることを前提としています。したがって、既存のICT機器やサービスの利活用促進のためには、高齢者の特性に配慮した「操作性」の向上や、「誘引性」による魅力の創造と伝達、環境支援性による地域における学習支援やサポートなどが配慮事項として求められています。こうした2010年までの利活用促進方策の延長上には、「操作が容易なICT機器やサービスを、自分にとって有用と感じられる目的を持って、必要に応じて周囲の支援を受けながら主体的に使いこなしている」高齢者像を描くことができます。このような高齢者像の個々の意向やスキルに応じた様々な利活用場面を実現するために、操作性、誘引性、環境支援性のさらなる充実が求められます。

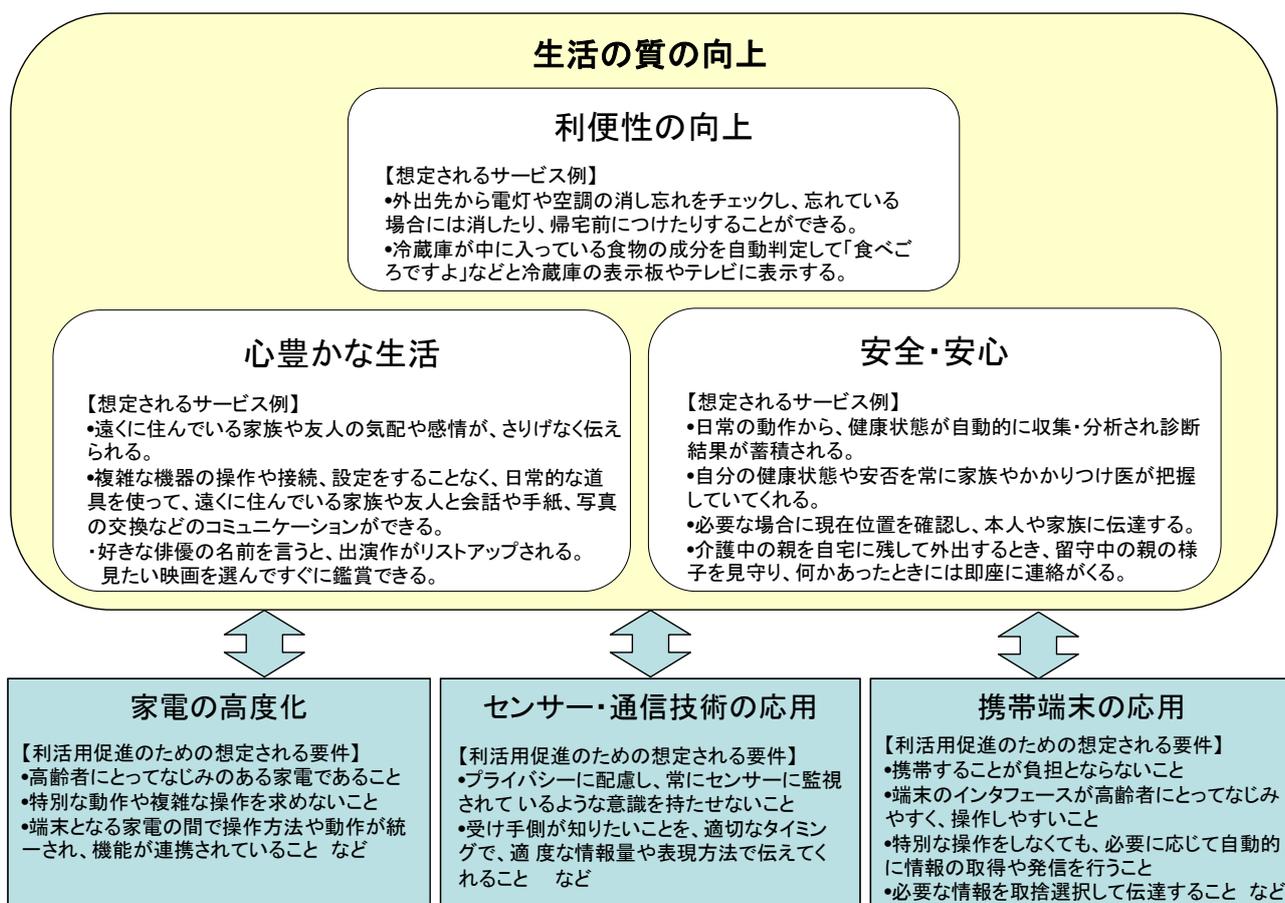
一方、2010年以降の中長期的な将来像を描くとき、ICT技術や環境の変化に伴うICT機器・サービスの進化や新たなICT機器・サービスの登場により、現在の利活用環境にとらわれない新しい利用形態や、生活の中でのICTとの新しい関わり方を想定することができます。

その1つの方向性として、ICT機器利用に対する意欲やスキルの有無や高低によらず、誰もが生活の中で自然にICTと関わるという利用像が考えられます。特に、一定の利用意向とスキルを持って主体的に利用することを望まない高齢者や、それが困難である高齢者にとっては、こうした利用形態がICT利活用の重要な手段となります。

このような『生活の中に溶け込んだICT機器・サービス』すなわちICTの存在を意識したり特別な操作をしたりすることなく、誰もが自然にICTを利活用できるような機器やサービスの開発・整備を目指すことは有意義であると考えられます。例えば、センサー技術やネットワーク技術、情報処理技術等の発展、高度化によって、ユーザが主体的な意図をもって操作を行うことなく、生活場面に埋め込まれたICTがユーザの生活を見守り、快適な生活を支援するといった、ICTとの関わり方が想定されます。あるいは、ユーザインタフェース技術の高度化により、パソコンのような特定の機器の複雑な操作スキルを身に付ける必要がなく、例えば、扉を開ける、取り出す、声をかけるといった日常的な行為の延長として、身の回りの道具や環境とインタラクションすることによりICTを利活用できるようになることも期待されます。

図表8は、将来の高齢者の生活の質を向上させるICT機器・サービスのあり方に関する有識者の意見を取りまとめたものです。ICTの利活用による高齢者の生活の質の向上としては、「情報提供や判断支援などにより利便性を高める」「感情に働きかけ心豊かな生活を支え

る」「安全・安心を提供する」といった側面が考えられます。また、それを実現するためのサービスや機器のあり方としては、主に「家電の高度化」「センサー技術の応用」「携帯端末の応用」などの方向が考えられます。ここに示したサービス例や利活用促進のための要件は、あくまでも一例として挙げられたものですが、今後はこのような観点から、高齢者の生活に溶け込み、それぞれの生活の質を向上させる ICT 機器・サービスの実現に向けて、さらなる検討と研究開発の進展が期待されます。



ICT機器・サービス開発の方向

図表 8 高齢者の生活の質を向上させる今後の ICT 機器・サービスのあり方(有識者意見)